'87.3.

児童文学

最首悟

子どものときの大人への思い

思いがけない作品がいろいろと

谷崎潤一郎「小さな王国」（少年少女日本文学館・第4巻）

井上ひさし編『児童文学名作全集』

妖しく酔いながら冷えこんでしまう

〈サジを投げる〉とは、手あてを尽して、手に負えなくなって、もうおまかせする他ないと思い定めることである。そうなったからといって、医者はべつに医者を廃業するわけではない。子どもについて、このことを少し品良くいうと、「子どもをうっちゃって置くだけの勇気をもつべきだ。彼らの知恵はわれわれのとは違う」（シャルドンヌ『愛をめぐる随想』）という具合になる。

彼は続けていう。「子どもの世界は、われわれのとは何のつながりもない。彼らとわれわれとでは、時間も同じではないし、温度にしろ、形にしろ、色にしろ、みんな別物である」。

子どもについて、思い悩むことのない大人は、たとえば、「一口にいえば、子どもというものは、食べて、飲んで、寝て、散歩することしかすることがないのだからね」などという。モーツアルトの、妻に宛てた、死ぬ一ケ月半前の最後の手紙だ。モーツアルトがどんな子どもだったか考えると、この言葉はひときわ光彩を放つ。もっともモーツアルトは終生子どもだったのかもしれない。あの暗さはただごとではないのだから。

神童といえば、少年少女日本文学館第四巻『小さな王国・海神丸』（講談社・一四〇〇円、一九八七・二月）に収められた谷崎潤一郎の『小さな王国』は、すごい。読んではいけない本のトップランクにあげたいくらいである。そうすると子どもは必らず読むだろうけれど。このシリーズは総ルビの他にむずかしい語句に赤線を引き、その場で赤字のルビ解説ともいうべき親切をほどこしている。目がチラチラして、内容ばかりじゃなしに、充血してくるようだ。今に字引会社は倒産する。

『小さな王国』について、巻末に河野多恵子が解説を担当している。そのなかで、「谷崎潤一郎は、少年時代から頭角を現わしていて、神童と言われたくらいであったという。しかも、まことに子供らしい子供であったようだ。自分あるいは自分たちの世界のことにまったく思いのおよばないおとなたちを嗤うのではなく、むしろ不思議で仕方がなかったのであるまいか」と書く（原文は総ルビつき、念のため）。

『小さな王国』は、その谷崎、三三歳のときの作品である。子どものときの大人への思いをひっくりかえして、そしてまたひっくりかえして書いた。モーツアルトとちがって、こちらは冷えこんできそうだ。子どもに絶対的に君臨する子どもの担任の先生からみた、その子どもの話で、最後に先生も、その子どもがつくる王国に入ってしまう。妖しく酔いながら冷えこんでしまう児童文学というのももちろんあるのだ、という発見がこの作品にはある。

正真正銘ぞっとする佐々木邦の作品

井上ひさしが選ぶ『児童文学名作全集』（福武文庫・①六〇〇円②五八〇円、一九八七・一月から）が出始めた。今のところ第一集、第二集計二七篇が出ている。第一集の井上ひさしの解説を読むと、どうやら彼の原点は、終戦の年だろうか、国民学校五年のときに徹夜で読んだ『坊ちゃん』にあるらしい。だからもちろん『坊ちゃん』は選ばれている。でも選ばれた作品全てが、彼の子どものときに読まれているわけではない。

彼が作品を選ぶ基準は、「子どもが夢中になって読む児童小説があれば、それは大人の読者にもきっとおもしろいはずだし、逆に大人が熱中する小説なら、子どもにおもしろくないはずがない」（第一集）のであり、熱中するカギは「謎」である（第二集）という。したがって、大人のための作品と子どものための作品の本質的なちがいは認めず、「謎の提示、その謎の解明、謎が解けたときの快感とともにもたらされる人間存在への深い洞察」が名作の条件なのである。

井上　ひさし氏

だから、彼のいう〈児童文学〉は、読者を限定して言っているのでないことはまずわかる。しかし内容については手がかりがつかめない。子どもの世界に、特有にかかわっていく作品ということでは、第一集の「莫切自根金成木…唐来参和」、「木賃宿…江見水蔭」「坊ちゃん…夏目漱石」、第二集の「供食会社…幸田露伴」、「蜘蛛の糸…芥川龍之介」、「監督判事…秋田雨雀」などはあてはまらない。もう少し刊行が進んでみないとわからないが、「井上ひさし氏が独自の視点で選ぶ」ところの「日本児童文学史に燦然と輝く珠玉の名作」という惹句には、どうも釈然としないところが残る。

それはそれとして、手練れの読み手でもあろう編者が、このような形でまとめてくれるのはうれしい。初めて読む思いがけない作品がいろいろとある。

なかでも、第二集の佐々木邦の「いたずら小僧日記」は、第二集の半分を占める長篇で、編者がまっ先に読んでもらいたいという、おすすめ品であるが、初めて読んで、裏心なく正真正銘ぞっとしてしまった。

ルース・ベネディクトの『菊と刀』は、「子どもは学ぶ」という章の、日本の子どもの分析が一番秀れているといわれるのだが、ちなみに彼女は、猪突猛進的天皇崇拝主義者をつくるのは、軍隊と中学校のいじめであって、これをなくさないと日本の改革はおぼつかないといっている。それはさておき、彼女は、日本の男の子が手のつけられないいたずらをして、親や社会がそれに対して寛容なのは、少年時代からの非社会的行為には、他の集団ばかりでなく、家族集団から最も激しく排除されてしまう裏返し現象なのだという。そしてそのような例は世界に稀だと指摘する。

そのような恐怖の予感に裏打ちされたいたずらはかわいい気がない。ましてユーモアがあるわけがない。「いたずら小僧日記」はちょうどそのような構図にあてはまる作品である。悪いことに主人公は金持ちの息子であるのだ。ただし、いよいよ奈落に向おうとする大人の状況のなかで、屈折した子どもを活写したというふうに言えば、佐々木邦は偉大だ。（さいしゅ・さとる氏＝東京大学助手・生物学専攻）